

国立看護大学校図書館

25周年記念誌



Library of National College of Nursing, Japan



目次

歴代図書館長 ごあいさつ

図書館 25 周年を迎えるにあたって

9 代目図書館長 小島優子 1

開館 25 周年に寄せて

初代図書館長 竹内文生 2

図書館の思い出

3 代目図書館長 駒松仁子 3

25 周年記念にあたって — 寄贈された書籍等からのメッセージ —

4 代目図書館長 佐々木和子 4

図書館の思い出 — 図書館長の経験から学んだ大学図書館と司書 —

6 代目図書館長 竹村玲子 5

「耕された図書館」への想い

8 代目図書館長 本間典子 6

司書による企画展示の展開 — 学びと社会に応える図書館の取り組み — 7

国立看護大学校図書館 25 周年の歩み

沿革・歴代館長紹介 8

図書館ミッション 9

特別展示室の新設

女性の歴史意を紡ぐ——お産の歴史的物品と資料 10

戦後の看護教育の変遷 国立看護大学校所蔵の貴重書をたどる 11

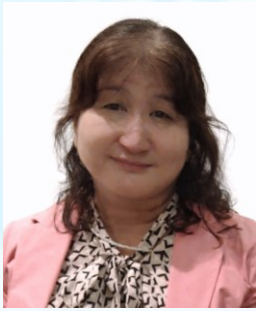
貴重書の紹介

ナイチンゲール関連書 12

「国立看護大学校図書館の貴重書について ～「ケア物資」と「ララ物資」～

図書館長 小島優子 14

館内写真 16



9代目図書館長（2026年度～）

国立看護大学校教授 小島 優子

図書館 25周年を迎えるにあたって

2026年4月から、図書館長を務めることとなりました。専門はドイツ近代哲学です。これまでの研究活動を振り返りますと、ポスドク研究員時代には、オープンリサーチセンター事業の一環として神社祭礼の聞き取り調査に携わり、秩父夜祭の花飾りを大学博物館に収蔵し、キャプションを作成して展示いたしました。氏子の方々が制作する祭礼具には、祭りに対する思いや祈りが込められており、そうした精神性の表れを読み解きました。また、国立大学准教授在職中には、科学研究費事業により、ドイツの哲学者ヘーゲルが大学の夏期休暇中にオランダやウィーンを訪れた際、どのような絵画を觀賞したのかを明らかにするため、19世紀の美術館カタログの調査を行いました。文献や資料の背後にある人間の営みや思想を読み取ることに、関心を寄せてまいりました。

こうした観点から本学の図書館を見ますと、国立東京第一病院附属高等看護学院時代からの貴重書が桐箱に納められ大切に保管されています。これらは日本の戦後看護史の貴重な文献学資料であり、書物の書き込みや寄贈書メッセージの中に看護の精神が受け継がれているのを読み取ることができます。

例えば、本学図書館には、看護学院に1951年7月3日に受け入れられた洋書の讃美歌集が2冊（各12冊および17冊）所蔵されております。そのうちの1冊には讃美歌312番“*What a friend*”の英語および日本語訳「いつくしみふかき」の歌詞に加え、こども讃美歌「ばらばらひかる」の歌詞プリントが挿まれていました。1951年6月14日G H Q看護課長を務めたグレース・オルト氏とヴァージニア・オルソン氏の送別会において、学生たちがオルソン氏の大好きな讃美歌“*What a friend*”を合唱した記録が遺されていることから、このプリントはその際に用いられたものである可能性が高いと考えられます。当時、看護学院の宗教部に所属する学生たちは、これらの讃美歌集を用いて毎週練習を重ね、クリスマス礼拝や小児科慰問で披露していました。占領下という時代背景のもとで、学生たちはアメリカの看護を学ぶためにアメリカの文化や社会も学び、講師によるバイブルクラスも受けながら、看護の精神性を体得していきました。

このように、本学図書館は一方では日本の戦後看護史を紐解くうえで重要な役割を担う一方、2025年4月より国立健康危機管理研究機構国立看護大学校として新たな歩みを始め、国立国際医療センターとのデータベース連携により、最新の医学文献を迅速に参照できる環境を備えております。

今後は、学生や教職員が卒業研究や論文執筆においてより一層活用できるよう、利便性の充実に努めるとともに、本学図書館がこれまで築いてきた歴史と伝統を継承し、さらなる発展へとつなげてまいりたいと存じます。



初代図書館長（2001年-2004年度）

竹内 文生

開館 25 周年に寄せて

図書館が開館して 25 周年とのことお喜び申し上げます。

私が初代館長となったのは、大学校開校と同時にたまたま情報関係の分野の教官として着任したことも関係していたことと思います。それとは別に図書館とのかかわりは大学院時代にさかのぼります。私の学生時代には他学部の講義を受講することが可能であったので内容があまりよくわからないままに「参考調査」という教育学部の講義を聴講しました。「参考調査」とは図書館の重要な活動の一つであるレファレンスサービスのことでその考え方を解説するものでした。研究活動を進める上での基本的なスキルについて役に立つものであるとわかり面白く聴講したものでした。こうした経験が図書館長としての役に立つとはその当時はあまり考えてはいませんでした。感慨深いものがありました。

最近、図書館に雑誌を寄贈しにお尋ねした際に館内を案内していただきましたが、雑誌コーナーの棚の多くが空っぽになっていたのには驚きました。現在ではインターネットを介して検索していることを考えると当然のように思われました。

開館 25 年ともなると図書館をめぐる環境も大きく変わってきたことを如実に示している現象で、図書館の構造にも少なからず変化が必要になってきています。ご承知のように書籍の形もKindleに代表される電子書籍として刊行されるようになりました。文献検索の方法もインターネットを介した情報検索が普及していますし、さらには AI が実用化し文献検索にも応用されつつあります。多くの文献の中から有用な文献を探すことは技術的には簡便となりましたが、文献や情報を検索するうえで最も重要なことはどのような資料を求めているのか整理することだと考えます。容易に情報が集められる時代になって、情報の山に埋もれることのないようにしたいものです。

さて、こうした時代における図書館の役割とは何かと考えてみますと、関連する広範囲な領域の文献資料へアクセスするための手がかりを提供することではないでしょうか。医療や看護の専門分野でも研究の関心が多様化していますが、関連領域が広がり他の分野からも多くの関心が向けられています。最近手に入れた「疾病と人文学」(岩波書店)では人文科学系の方々の論考が何編も紹介されていました。人間の生活にかかわることすべてが少なからず医療や看護にかかわっているのです。

私は今でも書店を歩くことが楽しみですが、できるだけ専門外の書棚も見るようにしています。そうすると看護や医療に関する他分野の関心が示されている書籍に遭遇することがあります。図書館の利用者特に学生の皆さんには専門領域についてはもちろんですが、多様な分野への関心を持ってもらいたいと考えています。そうした意味で図書館内をぶらついて面白そうな書籍を手にとってもらえるようになることも大切ではないかと思えます。書店でも図書館でもふとした機会に手にした書籍がその人の人生の方向付けをすることがあります。図書館がそうした空間の一つとして機能していくことがこれからは期待されるものと思います。



3 代目図書館長（2007 年-2008 年度）

駒松 仁子

図書館の思い出

開館 25 周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

国立看護大学校開校時、私は小児看護学教授として着任しました。立派な校舎と図書館に感動した日のことを昨日のように思い出します。

潤沢な予算のもと医療・看護領域にとどまることなく、広範囲な学問領域の図書が書架に並んでいきました。看護を学ぶ学生が心豊かで、広い視野のもとに人間理解が出来る教育基盤とするための図書が整備されました。さらに専門誌及び学会誌は、近接領域を含めて定期購読されていました。特筆すべきことは、元国立国際医療センター病院附属看護学校所蔵の貴重な和洋雑誌・図書（終戦直後からの古書）などが寄贈されていたことです。

私は時間に余裕が出来る図書館を訪れて、専門誌や学会誌を手にして興味ある記事はコピーしました。初年度は政策医療としての成育看護学（小児・母性）の構築を目指して、母性看護学の佐々木和子教授らと文献検討を行いました。小児看護の変遷、さらには成育医療が提唱された背景を調査した上で、成育看護学を構築しました。その後は「小児慢性疾患のキャリアー」を研究テーマとし調査に取り組みました。

平成 19 年 4 月、図書館長を拝命し、2 年後に定年を迎えて退官しました。

この頃は次第に予算が厳しくなり、和洋雑誌の定期購読を整理し、特に電子ジャーナルのある雑誌は中止することも告げられました。しかし、図書委員会で雑誌として手にすることが出来るメリットを主張して、継続購読していただきましたこと思い出します。

退官後もしばしば図書館を訪れ閲覧させていただきました。それは在職中からの継続で、「小児慢性疾患を有する患者の移行期支援・自立支援に関する文献目録」を作成するためでした。その一方でライフワークとして、大正・昭和に在野で母と子のために生涯を捧げ、昭和初期に虚弱児・障害児の施設「三田谷治療教育院」を創立した、小児科医師三田谷啓の思想と活動に関する調査に取り組んでいました。当時、三田谷啓の著作目録の作成が重要課題でした。その頃、他大学図書館への文献複写依頼の件で苦慮していました。司書の土門さんが図書館長竹村玲子教授に相談していただき、特別に許可していただきました。そして、司書の竹下さんや阿久津さんたちのご尽力のもと、沢山の三田谷啓の文献の複写依頼をしていただきました。丁度、コロナ禍の時期で、何度も東門の処で竹下さんより届いた文献をいただいた日々を懐かしく思い出します。

三田谷啓の著作目録および「三田谷啓の全体像を追い求めて」と題する論稿は『社会福祉法人 三田谷治療教育院 95 年史』に載録され、間もなく刊行に至ります。

私にとって図書館で過ごした時間は、至福のひと時でした。在職中のみならず退官後も、ご高配を賜りましたことで、82 歳になった現在もライフワークを継続できていることに感謝の気持ちで一杯です。



4 代目図書館長（2009 年-2013 年度）

佐々木 和子

25 周年記念にあたって 一寄贈された書籍等からのメッセージ

本寄稿に先立ち国立看護大学校図書館特別展示“戦後の看護教育の変遷 国立看護大学校所蔵の貴重書をたどる”を拝見した。私事を含むが過去に寄贈書を託されたエピソードを思い出し記すこととした。

私は1985(昭和60)年から約15年間、国立仙台病院附属看護助産学校助産学科（当時の名称）で助産師教育に携わった。私の赴任は助産学科開学8年目であった。当時は宮城県内のみならず東北・北海道は助産師不足であり助産教育は地域でも歓迎・期待され、学生も意欲的に勉学していたと感じる。そのような背景からか学生の教育に役立ててほしいとのメッセージとともに書籍資料を託されることがあった。そのうち2例を紹介し寄贈された先人のメッセージを推察するきっかけにしたい。

<保健婦助産婦看護婦法の解説> 厚生省医務局看護課 厚生事務官 鈴木猛著 昭和27年初版
この書籍は仙台市近郊の市民男性がご持参下さった一冊である。ご家族であった祖母様の遺品であり祖母様は大変な勉強家であったので遺品の複数書籍は現教育にも役に立つであろうと届けて下さった。この書は（現在であれば）看護職は手元に置く常用名書籍であるが、なんとそれは初版本であった。（失礼ながら寄贈者の背景は詳しく伺わなかったことが悔やまれる）さてこの看護職の大先輩は戦後の状況の中、どのように勉学に励まれたのだろうか。詳しく知ることは不可能であるが初版本の著者の鈴木氏の序文から当時の背景を推察してみる。序文に、“終戦後における我国の医療制度の改革は、まことに画期的なものがあつた。しかし、その形式（Form）は殆んど連合国の強い勧告によつて与えられたものであり、従つて実質（Materie）との間にかなりのギャップがあつた場合もあり、これが当時において新しい医療制度に対して一般に不安と疑問とを懐かせた所以であつた”と記されている。厚生行政トップの方の偽らざる不安の記述とするなら、それを御旗に勉学に励む先輩看護職の方々の心情はいかなるものだったのだろうか。

<産婆学教科書>

東京助産女学校校長 医学博士 佐久間兼信著 第1巻から第7巻

この書籍は宮城県内の開業助産婦さんがご持参下さったものである。“とにかく新しい助産婦学校ができ後輩助産婦が育ってくることが大変うれしい。自分が学んだ教科書であるが若者の教育に役立ててほしい。”とのメッセージであった。書籍は全7巻で総ページ数は約1000ページ弱に及ぶ立派なものであり、丁寧に使用されたであろうことが推察される美品であった。書籍は大正8年が初版でその後、年1～6回版が重ねられており大変な人気であったことが推察される。寄贈書は昭和4年の第34刷のものであった。50年以上経ての寄贈とおもわれ開業助産婦の強く溢れるような想いを感じるものである。

図書館に所蔵されている書籍に込められた思いを記録する機会を頂き御礼を申し上げます。



6 代目図書館長（2017 年-2019 年度）

竹村 玲子

図書館の思い出 ―図書館長の経験から学んだ大学図書館と司書―

開館 25 周年おめでとうございます。私は諸先生が大切に育ててくださった図書館を引き継いで、2017 年 4 月から 3 年間で担当しました。この間に一番困ったことは図書係長職が廃止になったことです。そこで、当時の司書のうち 1 名を統括司書として土門千雅子さんをお願いして、新しい体制になりました。土門さんについては他の司書さん全員が統括担当に賛成してくれました。この体制の中で、大学図書館と司書さんの仕事について学んだことをこの機会にご紹介したいと思います。

大学図書館の資料は「NACSIS-CAT」という方法でデータ登録されていて、「NACSIS-ILL」という相互貸借制度でコピーや資料を取り寄せることができます。このシステムを理解していないと外部用の NACSIS データを更新することができません。本学は看護系図書館としては、充実した図書や学術雑誌をそろえているにもかかわらず、ILL 料金相殺の収支がしばしばマイナスでした。しかし、データ登録の見直しで情報が更新され、他館からの受付件数が増加しプラスに転じました。

海外の電子ジャーナルは「大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）」で団体交渉した価格で購入しています。本学では多くの電子ジャーナルを利用することができますが、毎年の価格高騰は激しく、予算内での購読維持には困難が伴います。しかし、土門司書の調査で国立看護大学校と国立国際医療研究センター（当時）とが連携することで費用の削減と利便性の向上ができるとわかり、協力する体制になりました。

ところで、せっかく契約した電子ジャーナルも、文献検索をした時に、本学で利用可能と表示されるのには、リンクリゾルバというシステムとの連携が必要です。細かいことのようにですが、これについても状態が改善されました。

さて、オープンサイエンスの考え方に基づいて多くの大学や研究機関は学術成果を発信する機関リポジトリをもっています。当時本学では未整備だったので、柏木先生、友滝先生、土門司書らにご尽力いただき、機関リポジトリをスタートさせたのも懐かしい思い出です。また、明治薬科大学、社会事業大学との三大学図書館相互協力の文書化も懐かしい思い出です。

3 年間の経験を通して思ったことは、大学図書館の維持には専門職としての司書さんの存在が不可欠だということで、その地位の向上が望まれます。また、2018 年度、2019 年度は紛失図書が 0 件で、国立看護大学校の学生の資質の高さも誇りに思いました。お世話になりました関係者の皆様に感謝するとともに、今後の図書館の発展をお祈りいたします。



8 代目図書館長（2021 年-2025 年度）

国立看護大学校教授 本間 典子

「耕された図書館」への想い

二〇二六年四月、国立看護大学校図書館は開館二十五周年という節目を迎えました。二〇〇一年の開館以来、本学図書館は、看護学の知の拠点として、学生・教職員・卒業生、そして多くの看護職の皆様を支えられながら歩みを重ねてまいりました。四半世紀という歳月は決して短くはなく、その一日一日の積み重ねが、今日の書架と空間を形づくっております。

在任中、心に深く残る出来事があります。ある日、日本看護協会図書館の方々が本学図書館をご訪問くださいました。館内をゆっくりと巡られ、書架の前で足を止め、展示室にも丁寧に目を向けられたのち、静かに「良く耕された図書館ですね」とおっしゃいました。その一言は、単なる蔵書数や施設設備への評価を超え、長年にわたる営みそのものを言い当てた言葉として、今も私の胸に残っております。

「耕す cultivate」とは、土を返し、整え、種を蒔き、時を待つ行為です。成果は一朝一夕に現れるものではなく、名もなき日々の手入れの積み重ねによって、はじめて豊かな実りへとつながります。本学図書館の書架には、歴代館長の理念と構想、司書の方々の専門的判断と誠実な選書、そして利用者一人ひとりの学びの軌跡が、静かに、しかし確かに刻まれています。その蓄積が、あの「耕された」という美しい比喻を生んだのではないかと一人静かに感じ入っておりました。

二十五年の間に、図書館を取り巻く環境は大きく変化しました。紙媒体中心の時代から電子情報資源が拡充する時代へと移行し、情報へのアクセスは飛躍的に広がりました。私が館長を拝命した二〇二一年度は、新型コロナウイルス感染症の影響下にあり、対面利用が制限される中での運営を余儀なくされました。電子書籍やリモートアクセス環境の整備を進め、「離れていても学びを止めない」体制を築いた経験は、図書館が単なる物理的空間ではなく、知を媒介する関係と支援のネットワークであることを改めて教えてくれました。

しかし、どれほど技術が進進しようとも、図書館の本質は変わりません。それは、人が思索し、対話し、専門職としての倫理と責任を育むための土壌であるということです。看護という実践的かつ人間的な学問を支える図書館である以上、私たちは常に、「全人教育」を目指して知の確かさと温かさの双方を大切にしなければなりません。

この三月をもって館長の任を終えるにあたり、私は「前図書館長」として本稿を記しておりますが、心は今も書架の間にあります。図書館開館二十五周年記念誌の構想段階から完成に至るまでを見守ることができたことは、望外の喜びでありました。そして何より、本学図書館が、多くの方々の想いによって丁寧に耕されてきた場であることを、あらためて誇りに思います。

これからの二十五年に向けて願うことはただ一つです。本学図書館が「耕された図書館」であり続けること、そして「耕され続ける図書館」であってほしいということです。耕す営みは終わることがありません。時代が移り、技術が変わり、利用形態が変化しても、土を整え、知を選び、学びを支える姿勢だけは変わらずにあってほしいと願います。

本図書館を築いてくださったすべての方々に深く感謝申し上げますとともに、未来の学生たちがこの土壌の上で豊かに学び、看護の道を力強く歩まれることを心より祈念し、私の挨拶といたします。

司書による企画展示の展開 — 学びと社会に応える図書館の取り組み —

本学図書館では、2019 年より司書による企画展示を本格的に開始しました。常設の展示スペースを活用し、年間およそ 4～6 回、所蔵資料を主題ごとに再構成して紹介しています。選書から解説文の作成までを司書が担い、利用者の関心や学修状況に応じたテーマ設定を行ってきました。

学生の学びを支える取り組みとして、「卒業研究応援」や看護師国家試験対策に関連する資料を集めた展示など、学修支援を目的とした企画を毎年実施しています。関連図書をまとめて紹介することで、必要な資料へのアクセスを促し、学修や研究を進めるための手がかりを提供しています。

また、社会的関心の高いテーマを扱う展示にも取り組んでいます。感染症拡大期には「感染症」に関する資料を集め、医学・歴史・社会など多様な視点から情報を提示しました。あわせて、「癒される本」「自分を大切にできる本」といった展示を行い、読書を通じて心身を整える時間を提供することを意図しました。

そのほか、LGBTQ+に関する資料紹介や闘病記を集めた展示など、多様な生き方や経験への理解を深めることを目的とした企画も実施しています。こうした展示は、学術的関心だけでなく、利用者一人ひとりの生活や関心に寄り添う図書館の役割を示すものです。

司書による企画展示は、図書館が資料を収集・保存・提供する場であると同時に、知を編集し社会や利用者の状況に応じて発信する場であることを示しています。今後も、学生の学びと研究を支える取り組みとして継続的に発展させていきたいと考えております。



2021 年「世界の医療・国際協力」展示の様子



2023 年「闘病記を読んでみよう」展示の様子

これまでの企画展のあゆみ

2019 年 ジェンダーバイオレンス

2020 年 感染症を知る—正しい知識と予防／癒しの本、図書館にあります

2021 年 世界の医療・国際協力／闘病記を読んでみよう／読書って楽しい!! 司書イチ推し本

2022 年 図書館の貴重書から—国立看護大学校の原点／闘病記を読んでみよう／こんな時代だからこそ、気持ちが晴れる本／世界の医療・国際協力

2023 年 コロナを考える／司書おすすめ図書／闘病記を読んでみよう／ジェンダー平等を考える

2024 年 世界の医療・国際協力／私のおすすめの 1 冊／NCGM 医療技術等国際展開推進事業 国際協力

2025 年 「食べる」を読む／あなたを守る本／身体を大切にしよう／ジェンダーと LGBTQ+ を考える

常設展 1 月：卒業研究対策コーナー 10 月：国試対策コーナー

看護大学校図書館 25 年間の歩み

2026 年 4 月 9 日、国立看護大学校図書館は開館 25 周年を迎えます

沿革

- 2001 年 国立看護大学校開校 同時に 図書館開設蔵書約 20,000 冊でスタート
- 2003 年 NACSIS ILL サービス参加館となる（非相殺館）
- 2006 年 初代大学校長竹尾恵子先生より 833 冊のご寄贈を受け、竹尾文庫設置
- 2008 年 くつろぎコーナー設置
- 2010 年 NACSIS ILL 相殺サービス参加館となる
- 2015 年 国立国会図書館デジタル送信サービスの申請を行い承認される
- 2019 年 三大包括連携協定による社会事業大学と明治薬科大学との図書館相互利用が始まる
大学図書館コンソーシアム（JUSTICE）参加
司書による企画展導入
- 2020 年 機関リポジトリ公開
- 2021 年 図書館のミッションを HP 上に公開
- 2023 年 ラーニングコモンズ開設
電子書籍の導入拡充
研究課程部生の土日利用開始
- 2025 年 蔵書数約 76,000 冊
- 2026 年 国立看護大学校図書館開館 25 周年

歴代館長

2001-2004 年度	竹内 文夫	人間科学：情報学
2005-2006 年度	高橋 泰子	基礎看護学：看護管理学
2007-2008 年度	駒松 仁子	成育看護学：小児看護学
2009-2013 年度	佐々木 和子	成育看護学：母性看護学
2014-2016 年度	林 稚佳子	老年看護学：老年看護学
2017-2019 年度	竹村 玲子	人間科学：生命科学
2020-2020 年度	嶋津 多恵子	老年看護学：長寿看護学
2021-2025 年度	本間 典子	人間科学：生命科学
2026-現在	小島 優子	人間科学：倫理学



国立看護大学校図書館 ミッション

本学の教育理念である「人間存在の理解」「深い洞察力と共感」「生命の尊厳と自由を貴ぶ倫理観」を養い、ヒューマンケアの精神に基づいた高度専門的看護の実践を目指す看護学生への学修支援を使命として、図書館は5つの柱を重点としたサポートを行う。

1. 豊かな人間性と知識の涵養

医療・看護分野をはじめ、文化や歴史等、幅広く豊かな情報資源の収集に努める。

図書館を通じて、学生・教職員・病院関係者が双方で知識を共有し深め合うことで、新たなコミュニティの創成に寄与する。

2. 看護職の基盤となる能力の育成と生涯学習支援

カリキュラムに則した資料の収集と組織化に取り組み、多様なメディアを利用可能とする環境整備に努める。

学生個々の目的に応じた学修環境を提供し、自律した学習を支援する。グループ学習室の積極的な

活用を促し、将来チーム医療の場で専門看護の知見から積極的な発言が出来る人材の育成を支援する。

学生が卒業後も自ら課題解決に取り組むことが出来るよう、図書館の基本的な使い方から、生涯学習のための情報検索技能の習得までを支援する。

3. 研究支援と情報活用

研究課題に応じて、グローバルな情報検索の提案と、情報リテラシー教育の支援、文献へのアクセスを提供する。また、司書はそのための研修に努める。

学術関係機関に属することで国際的な動向を意識しつつ、機関リポジトリによる本学の教育・研究成果の適切な保存と公開を行う。

4. 交流支援と対話の促進

図書館が多機能スペースを持つことにより、コミュニティの場を提供し、学生や教職員、学外の交流に寄与する。

国際社会への意識や高いコミュニケーション能力、災害援助や感染症等、様々なテーマを用いた展示やワークショップを通じて人間存在の理解へと導く場を提供する。

5. 知の開放と社会貢献

国内でも有数の看護系図書館として、医療従事者、近隣の看護学生等、地域住民に対して図書館を開放する。

医療・看護関係団体と連携し、看護系専門図書館の発展に努めると共に、貴重な資料を適切に保存・管理し、知の遺産を後世へ伝える事に努める。

特別展示室の新設

2023年に特別展示室を新設しました

図書だけでなく、歴史的物品や資料等、看護に関する幅広い展示を行っています
本稿では、過去に開催された展示内容を紹介します

女性の歴史を紡ぐ— お産の歴史的物品と資料

開催期間 2023年8月15日～2024年7月25日



本展示では、日本が大正から昭和初期の二度の大戦を経験した時代に、周産期環境が目まぐるしく変化した様子を展示物や資料で紹介しました。



▲江戸時代の産科医術書や大正時代の産婆学書、昭和初期の助産婦教科書など、貴重な書籍が展示されました。



◀1910年製の妊婦モデル：和紙と木でできています。関節が動き、胎内に胎児モデルを入れて経腔的に娩出させるなど、現代の教材に近い機能があります。



▲昭和初期のお産の道具

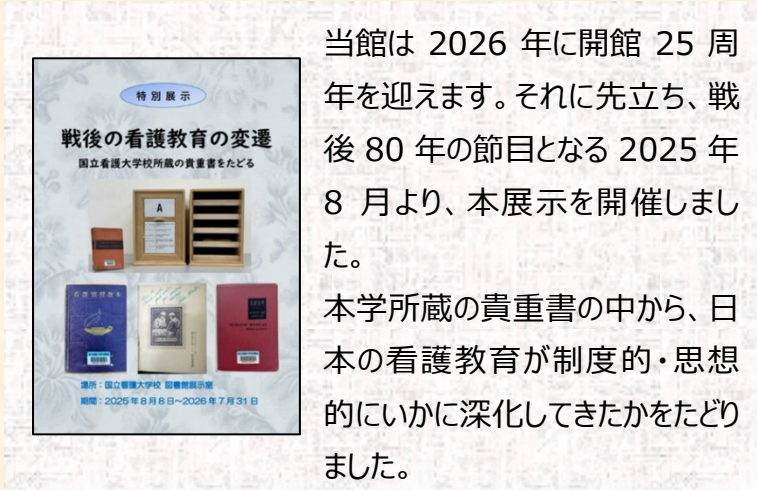


◀昭和初期の避妊具：
・ベッサリー
・殺精子錠
・殺精子ゼリー
・避妊スポンジ

戦後の看護教育の変遷

国立看護大学校所蔵の貴重書をたどる

開催期間 2025年8月4日～2026年7月31日



当館は 2026 年に開館 25 周年を迎えます。それに先立ち、戦後 80 年の節目となる 2025 年 8 月より、本展示を開催しました。本学所蔵の貴重書の中から、日本の看護教育が制度的・思想的にいかに深化してきたかをたどりました。



▲展示の様子：戦後の看護教科書



▲貴重書保管用桐箱

貴重書は普段は閉架書庫で保管されています。桐箱は調湿性や防虫・防腐効果に優れており、適切な状態での長期保存を可能にします。



▲展示の様子：左から古屋かのえ先生、壁島あや子先生、松本（鈴木）八重子先生関連資料

渡部尚子先生による講演会「戦後占領期の看護改革について」

国立看護大学校創立 25 周年を記念し、2025 年 9 月に聖路加国際大学名誉教授 渡部尚子先生による講演会「戦後占領期の看護改革について」が開催されました。戦後の日本の看護教育が GHQ によって改革されてきた歴史を学ぶとともに、現代における看護教育の意味とあり方を考える機会となりました。

貴重資料の紹介

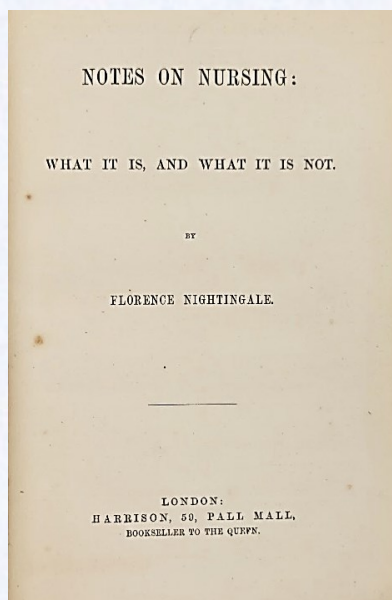
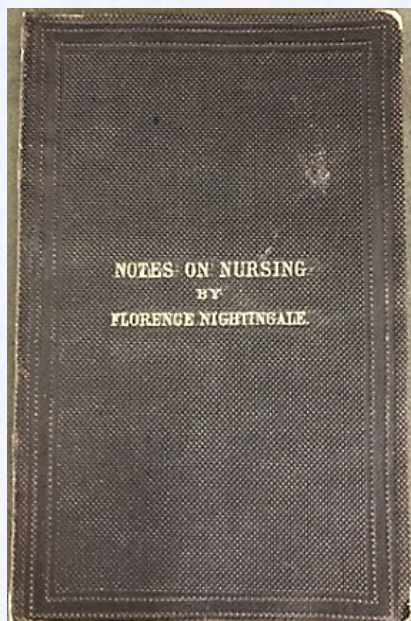
19世紀に刊行されたナイチンゲール関連の原著をはじめとする貴重書を所蔵しています



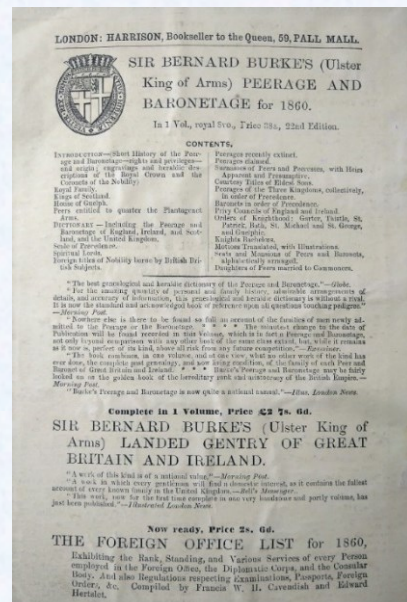
①ナイチンゲール「看護覚え書」

[1860]

『Notes on nursing : what it is, and what it is not』



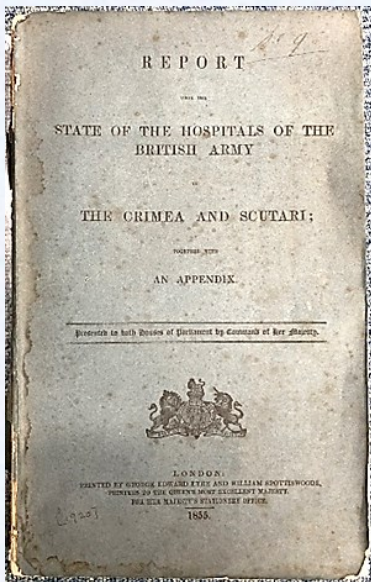
標題紙



表紙見返し

1860年に出版された「看護覚え書」の初版本の初期の刷です。「看護覚え書」は広く読まれるようになったために無断翻訳を防ぐ目的で、後の刷では標題紙に〔The right of Translation is reserved.〕と付記されるようになりましたが、本書にはその記載がありません。また、表紙見返しに淡いクリーム色で印刷された広告「LONDON: HARRISON, Bookseller to the Queen, 59, PALL MALL」が見られること、W・H・スミス社のエンボス加工が施されていることから、初版本の初期の刷と考えられます。

「Notes on nursing : what it is, and what it is not」は、第1版が1860年に全ての女性向けに刊行され、ベストセラーとなりました。第2版は1860年に補章「看護師とは何か」を加えて看護師を対象に出版されました。さらに、第3版「Notes on nursing for the labouring classes」は1861年に労働者階級向けに分かりやすく編集されて出版されました。



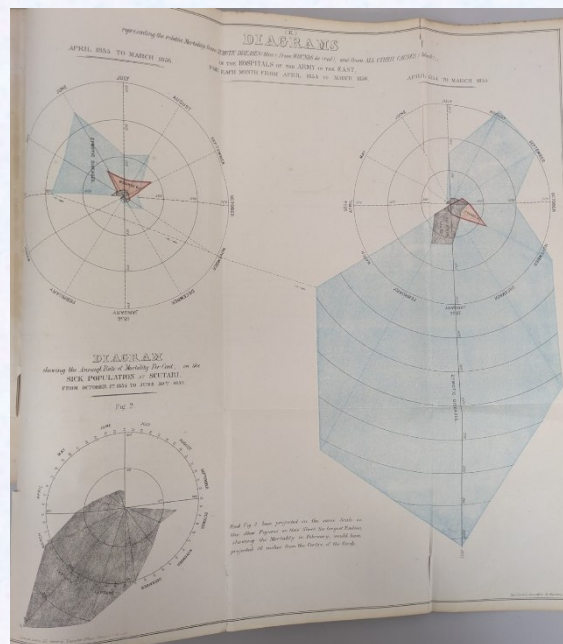
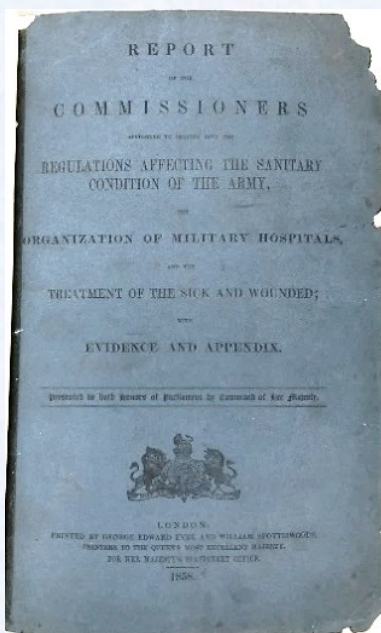
② ナイチンゲール「クリミア、スクタリの英国野戦病院報告書」1855

『Report upon the state of the hospitals of the British army in the Crimea and Scutari, together with an appendix.』

こちらの資料は国会にあてた報告書であり、実際にクリミアでナイチンゲールがどのような活動をしたのかが記されています。戦地の病院において、医薬品の適切な供給はもちろん、換気や患者の運動スペースを考慮して病床を配置する必要があること、感染症から患者を守るために適切に調理された食事と清潔な衣服が支給される必要があること、などが記載されています。

③ ナイチンゲール「野戦病院規定調査報告書」1858

『Report of the commissioners appointed to inquire into the regulations affecting the sanitary condition of the army : the organization of military hospitals, and the treatment of the sick and wounded; with Evidence and Appendix』



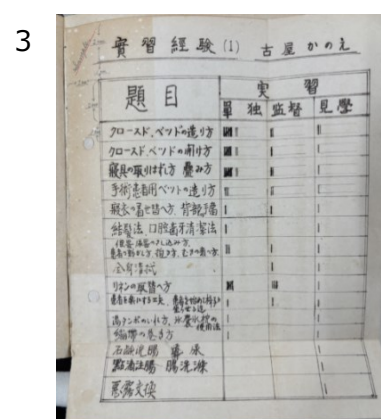
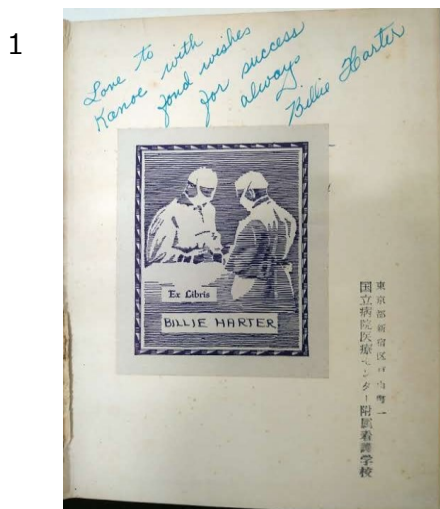
ナイチンゲールはクリミア戦争に女性看護団を率いて参加して傷病者の看護をしました。しかし、野戦病院は衛生状態が非常に悪く、負傷よりも感染症で大半が死亡している状態でした。このため戦後ナイチンゲールは国会での報告書で統計データを用いてそのことを示しました。ここに開いている図は、「コウモリの翼(Bat's Wing)」と呼ばれ、兵士の死亡率が月ごとに表されています。青が感染症、赤が負傷、黒がその他による死亡率です。感染症による死亡率が右のグラフ(1854年4月～1855年3月)では高いのに対して、1855年3月にイギリスから衛生委員会が派遣されて下水溝や便所、換気など病院の改修工事により衛生状態が改善されると、左のグラフ(1855年4月～1856年3月)では減少していることが視覚的に示されています。

国立看護大学校図書館の貴重書について ～「ケア物資」と「ララ物資」～

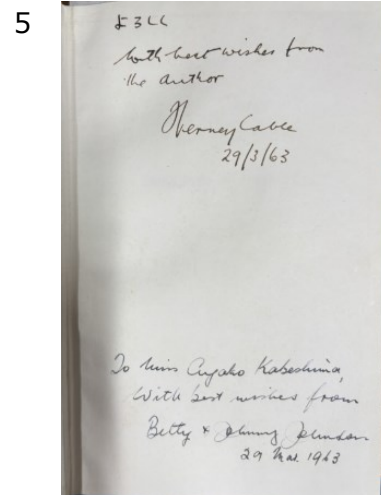
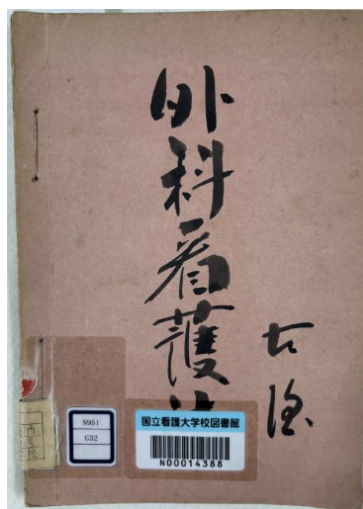
図書館長 小島 優子

国立看護大学校には、国立国際医療センター病院附属看護学校から譲り受けた多数の貴重書が所蔵されています。これらの貴重書には、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）看護課のビリー・ハーター先生から寄贈された洋書5冊、国立東京第一病院附属高等看護学院（現国立国際医療センター）初代教務主任古屋かのえ先生寄贈による和書4冊、第2代教務主任壁島あや子先生寄贈による「壁島文庫」洋書17冊以上等が含まれています。

その他にも戦後の物資の少なかった時代にもかかわらず多数の看護に関する洋書があり、これらにはアメリカからの支援物資「ケア物資」によるもの、および当時「ララ物資」を配る拠点として機能していた戸山ネイバフッド・センターから寄贈された80冊以上の図書が含まれています。国立東京第一病院附属高等看護学院『学院新聞』から、戦後の図書室は図書部の学生たちによって運営され、教員やアメリカからの寄贈や、ダンスパーティーを開催してその収入から図書が購入されていたことが明らかになりました。

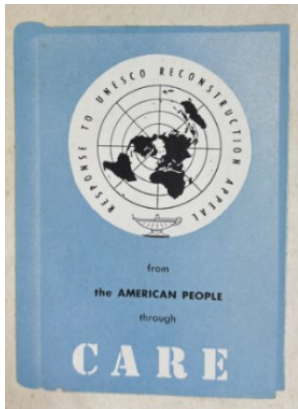


- 1 ビリー・ハーター先生からの寄贈本
『Human anatomy and physiology』
- 2 古屋かのえ先生からの寄贈本
3『看護実習教本』の中の貼付メモ
- 4 古屋かのえ先生からの寄贈本
『外科看護法』表紙に自筆の署名が見られる
- 5 壁島あや子先生からの寄贈本・壁島文庫
『Principles of medicine :
an integrated textbook for nurses』



■ ケア物資 (ケア : Cooperative for American Remittance Everywhere アメリカ救援物資発送協会)

ケア物資は、アメリカの市民団体による緊急支援物資であり、日本には 1948 年から 1955 年まで支援が行われました。食糧などの他、国会図書館や教育機関にも書籍が贈られました。『学院新聞』第 2 号 (1950 年 4 月 11 日) には、ケア物資代理店に「解剖学、栄養学、小児科学、物理的医学、医学辞典、看護、臨床学、社会、法典、手術室、臨床看護等」の図書を注文したと記されています。このようなケア物資蔵書票のある洋書が、本学図書館には 40 冊所蔵されています。

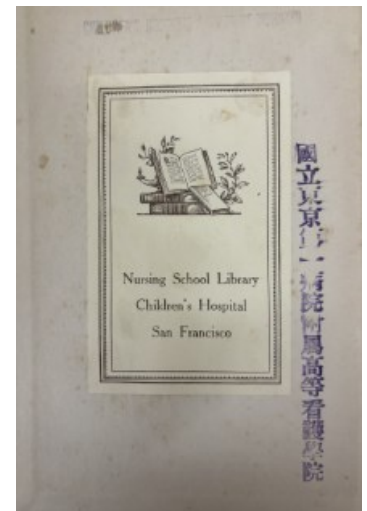


ケア物資蔵書票

ケア物資納品書

■ 戸山ネイバフッド・センター

戸山ネイバフッド・センターは、アメリカ・フレンズ奉仕団が 1949 年 7 月に新宿区戸山町の戸山ハイツ 7 号棟に開館した児童館です。『学院新聞』第 3 号 (1950 年 5 月 15 日) には、戸山ネイバフッド・センターから、「小児科の基礎及実習・看護婦の職業的關係・健康及病気の時の栄養・看護婦の為の内科学・看護婦の衛生及清潔・内科領域の臨床看護等」の洋書が寄贈されたと記されており、本学図書館所蔵のサンフランシスコ小児病院看護学校の蔵書票が貼付された 42 冊の洋書にこれらの書籍が含まれています。戸山ネイバフッド・センターは当時ララ物資 (LARA=Licensed Agencies for Relief in Asia : アジア救援公認団体) を配る拠点としての役割も果たしていました⁽¹⁾。ララ物資は、日本救済のためにアメリカ・フレンズ奉仕団などの団体が、1946 年から 1952 年まで食糧、衣料、薬品、書籍などの支援物資をアメリカで集めて配送し、日本の厚生省が配給した物資です。当時、アメリカで支援物資を集めるために中心的な役割を果たしたのはサンフランシスコの日系人であったこと、またサンフランシスコ小児病院が低所得者対象の慈善病院であったことから、看護学校図書館の除籍本が海を渡って寄贈されたと推測することができます。



サンフランシスコ小児病院看護学校の蔵書票

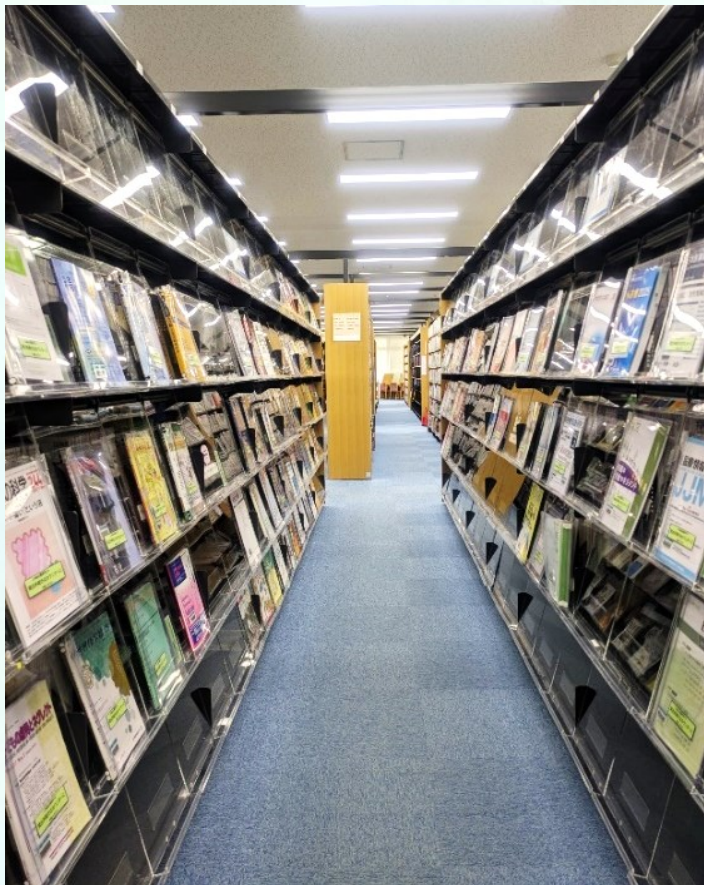
⁽¹⁾ 大高 真紀子; 定行 まり子「ネイバフッド・センターに関する考察 : 昭和20年代の東京の児童館に関する一考察」、『生活学論議』9 (0), 61-73, 2004年 ; 奥須磨子「ララ物資のはなし : 敗戦直後日本人への救援」、『東西南北』和光大学総合文化研究所, 175-184, 2007年

館内の様子

Inside the Library

最後に、図書館内の様子をご紹介します。

本館棟 1 階と 2 階の一部に位置する図書館には、書架のほか、グループ学習室やくつろぎコーナー、ラーニングcommonsなど多様な学習・交流スペースが設けられています。



閲覧席



雑誌架



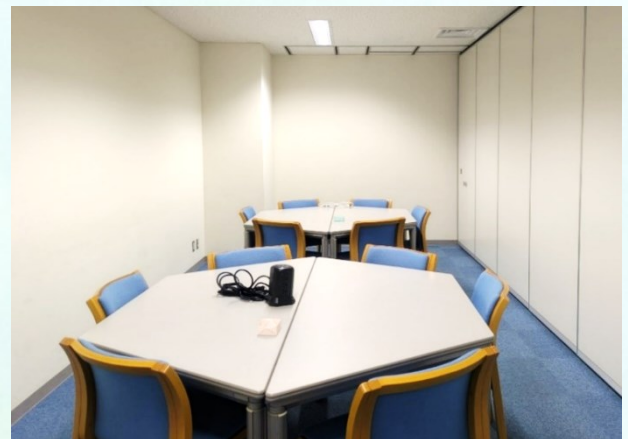
くつろぎコーナー



ラーニングcommons



グループ学習室



閉架書庫



貴重書保管用桐箱



国立健康危機管理研究機構 国立看護大学校図書館 25 周年記念誌

発行日：2026 年 4 月 1 日

発行：国立看護大学校図書館 (Library of National College of Nursing, Japan)

Library@ncn.ac.jp(e-mail) <https://www.ncn.ac.jp/library/>(Web)

編集：竹下 玲子 橋本 友加里